自己点検評価書

（対象年度：平成２０年度～平成２４年度）

平成２６年２月

トランスレーショナルリサーチ推進センター

目　　次

Ⅰ　トランスレーショナルリサーチ推進センターの現況及び特徴 ……1

Ⅱ　目　的 ……9

Ⅲ　基準ごとの自己評価

基準１　トランスレーショナルリサーチ推進センターの設置目的 ……１１

基準２　トランスレーショナルリサーチ推進センターの組織（実施体制）…１５

基準３　教員及び支援者 ……１７

基準４　学生・研究者等の受入れ ……１９

基準５　活動状況 ……２１

基準６　設置目的の成果 ……２３

基準７　学生・研究者等の支援等 ……２５

基準８　施設・設備 ……２７

基準９　財務 ……２９

基準 10 管理運営 ……３１

Ⅳ　根拠資料 ……別冊
（資料編、２００８年度活動報告書、２００９年度活動報告書、
２０１０年度活動報告書、２０１１年度活動報告書、２０１２年度活動報告書）

Ⅰ　トランスレーショナルリサーチ推進センターの現況及び特徴

１　現況

（１）部局名　福井大学トランスレーショナルリサーチ推進センター

（２）所在地　福井県福井市文京３丁目９－１

（３）部局の構成（平成２４年１０月４日現在）

運営委員会委員

センター長	医学部・教授	宮本　　薫
副センター長	医学部・教授	藤枝　重治
委員	教育地域科学部・教授	戎　　利光
	医学部・教授	長谷川智子
	医学部・准教授	吉田　　明
	工学研究科・教授	内田　博之
	産学官連携本部・准教授	吉長　重樹
	産学官連携本部・准教授	竹本　拓治

参加教員

《理事（研究・評価》

所属講座・領域名	氏　名	職　名
	ﾏｺﾐ ﾐﾂﾌﾐ 眞弓　光文	副学長
	合計人数	1

《　教育地域科学部・教育学研究科　》

所属講座・専攻・分野名	氏　名	職　名
発達科学講座	ﾐﾂﾊｼ ﾖｼﾉﾘ 三橋　美典	教授
人間科学講座	ｴﾋﾞｽ ﾄｼﾐﾂ 戎　利光	教授
	合計人数	2

《　医学部・附属病院　》

領　域　名	氏　名	職　名
内科学（１）	ｳｴﾀﾞ ﾀｶﾉﾘ 上田　孝典	教授
医学部	ｲﾎ ｽﾐｺ 伊保　澄子	講師
組織細胞形態学・神経科学	ｻﾄｳ ﾏｺﾄ 佐藤　真	教授
行動基礎科学	ｱﾍﾞ ﾋﾛｼ 安倍　博	教授
腫瘍病理学	ｲﾄｳ ﾋﾛｼ 伊藤　浩史	教授
	ﾉﾘｷ ｻｺﾝ 法木　左近	准教授
	ﾐﾖｼ ﾉﾘｵ 三好　憲雄	助教
微生物学	ｻﾀﾞ ｷﾖﾅｵ 定　清直	教授

	ﾁﾊﾗ ｶｽﾞﾔｽ 千原　一泰	准教授
分子生命科学	ﾌｼﾞｲ ﾕﾀｶ 藤井　豊	教授
	ﾀﾅｶ ﾕｷｴ 田中　幸枝	助教
病態遺伝生化学	ﾔｽﾀﾞ ﾄｼﾋﾛ 安田　年博	教授
分子遺伝学	ﾖｺﾀ ﾖｼﾌﾐ 横田　義史	教授
分子生体情報学	ﾐﾔﾓﾄ ｶｵﾙ 宮本　薫	教授
	ﾐｽﾞﾀﾆ ﾃﾂﾔ 水谷　哲也	准教授
	ﾔｻﾞﾜ ﾀｶｼ 矢澤　隆志	助教
	ｲﾏﾐﾁ ﾖｼﾀｶ 今道　力敬	特命助教
	ｶﾜﾍﾞ ｼﾝﾔ 河邊　真也	特命助教
薬理学	ｳﾜﾀﾞ ｼﾞｭﾝｽｹ 宇和田　淳介	助教
	ﾆｼﾑﾈ ｱﾂｼ 西宗　敦史	助教
高次脳機能	ﾏﾂﾓﾄ ﾋﾃﾞｷ 松本　英樹	准教授
領　域　名	氏　名	職　名
法医学・人類遺伝学	ﾏﾂｷ ﾀｶｽﾐ 松木　孝澄	教授
	ｼﾏﾀﾞ ｲﾁﾛｳ 島田　一郎	准教授
内科学（1）	ｷｼ ｼﾝｼﾞ 岸　慎治	講師
	ﾖｼﾀﾞ ｱｷﾗ 吉田　明	講師
	ﾔﾏｳﾁ ﾀｶﾋﾛ 山内　高弘	講師
内科学（2）	ﾖﾈﾀﾞ ﾏｺﾄ 米田　誠	准教授
	ﾊﾏﾉ ﾀﾀﾞﾉﾘ 濱野　忠則	講師
内科学（3）	ｺﾉｼﾀ ﾀﾀﾞｼ 此下　忠志	准教授
	ﾀｶﾊｼ ｻﾀﾞｵ 髙橋　貞夫	講師
	ｽｽﾞｷ ｼﾞﾝﾔ 鈴木　仁弥	助教

腎臓病態内科学、検査医学	ｷﾑﾗ ﾋﾃﾞｷ 木村　秀樹	准教授
小児科学	ｵｵｼﾏ ﾕｳｾｲ 大嶋　勇成	教授
	ﾀﾆｻﾞﾜ ｱｷﾋｺ 谷澤　昭彦	准教授
	ｶﾜﾀﾆ ﾏｻｵ 川谷　正男	講師
	ﾄｸﾘｷ ｼｭｳｺ 徳力　周子	助教
	ﾔｽﾄﾐ ﾓﾄｺ 安冨　素子	助教
精神医学	ﾀｶﾊｼ ﾃﾂﾔ 高橋　哲也	講師
皮膚科学	ﾁﾉ　ﾀｹﾅｵ 知野　剛直	医員
外科学（1）	ﾔﾏｸﾞﾁ ｱｷｵ 山口　明夫	教授
	ｺﾞｲ ﾀｶﾉﾘ 五井　孝憲	講師
	ﾏｴﾀﾞ ﾋﾛﾕｷ 前田　浩幸	助教
	ﾋﾛﾉ ﾔｽｵ 廣野　靖夫	助教
	ﾑﾗｶﾐ ﾏｺﾄ 村上　真	助教
外科学（2）	ｲｹﾀﾞ　ﾀｹｼ 池田　岳史	助教
整形外科学	ﾊﾞﾊﾞ　ﾋｻﾄｼ 馬場　久敏	教授
	ｳﾁﾀﾞ　ｹﾝｿﾞｳ 内田　研造	准教授
	ﾜﾀﾅﾍﾞ　ｼｭｳｼﾞ 渡邊　修司	医員
脳背髄神経外科学	ｷｸﾀ ｹﾝｲﾁﾛｳ 菊田　健一郎	教授
	ﾀｹｳﾁ ﾋﾛｱｷ 竹内　浩明	准教授
	ｷﾀｲ ﾘｭｳﾍｲ 北井　隆平	講師
麻酔・蘇生学	ｼｹﾞﾐ ｹﾝｼﾞ 重見　研司	教授
	ﾀﾊﾞﾀ ﾏﾘ 田畑　麻里	助教
産科婦人科学	ﾖｼﾀﾞ　ﾖｼｵ 吉田　好雄	准教授
	ｵﾘｻｶ ﾏｺﾄ 折坂　誠	講師

		ﾆｼｼﾞﾏ ｺｳｼﾞ 西島　浩二	助教
		ｸﾛｶﾜ ﾃﾂｼﾞ 黒川　哲司	講師
領域名		氏名	職名
泌尿器科学		ﾖｺﾔﾏ ｵｻﾑ 横山　修	教授
		ｱｷﾉ ﾋﾛﾉﾌﾞ 秋野　裕信	准教授
		ｵｵﾔﾏ ﾉﾌﾞﾕｷ 大山　伸幸	講師
		ﾐﾜ ﾖｼｼﾞ 三輪　吉司	講師
		ｱｵｷ ﾖｼﾀｶ 青木　芳隆	助教
眼科学		ﾀｶﾑﾗ ﾖｼﾋﾛ 髙村　佳弘	准教授
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学		ﾌｼﾞｴﾀﾞ ｼｹﾞﾊﾙ 藤枝　重治	教授
		ｻｲﾄｳ ﾀｹﾋｻ 齋藤　武久	准教授
		ﾔﾏﾀﾞ ﾀｹﾁﾖ 山田　武千代	講師
		ｻｶｼﾀ ﾏｻﾌﾐ 坂下　雅文	助教
		ﾅﾘﾀ ﾉﾘﾋｺ 成田　憲彦	助教
		ｲﾓﾄ ﾖｼﾏｻ 意元　義政	医員
歯科口腔外科学		ｻﾉ ｶｽﾞｵ 佐野　和生	教授
放射線医学		ｷﾑﾗ ﾋﾛﾋｺ 木村　浩彦	教授
		ﾂﾁﾀﾞ ﾀﾂﾛｳ 土田　龍郎	講師
		ﾑﾗｵｶ ﾉﾘｱｷ 村岡　紀昭	講師
		ﾔﾏﾓﾄ ﾀﾂﾔ 山元　龍哉	助教
基礎看護学	基礎看護学	ｳｴﾉ ｴｲｲﾁ 上野　栄一	教授
		ﾊｾｶﾞﾜ ﾄﾓｺ 長谷川　智子	教授
		ｳｴﾊﾗ ﾖｼｺ 上原　佳子	准教授
		ｻｻｷ ﾓﾓｴ 佐々木　百恵	助教

	生命基礎科学	ｷﾀﾉ ｶﾅｴ 北野　華奈恵	助教
		ﾄﾅﾐ ﾘｶ 礪波　利圭	助教
		ｲｲﾀﾞ ﾚｲｺ 飯田　礼子	准教授
	健康科学	ｼｹﾞﾏﾂ ﾖｳｽｹ 重松　陽介	教授
臨床看護学	成人・老人看護学	ｻｶｲ ｱｷｺ 酒井　明子	教授
		ﾂｷﾀﾞ ｶｽﾞﾐ 月田　佳寿美	准教授
		ｱｿｳ ｶﾜｲ 麻生　佳愛	講師
		ｳﾙｼｻｷ ﾀｶｺ 漆崎　誉子	助教
		ｽｽﾞｷ ﾐｴｺ 鈴木　美栄子	助教
	母子看護学・助産学	ﾓﾘｶﾜ ﾋﾛｺ 森川　浩子	講師
領　域　名		氏　名	職　名
地域看護学	地域看護学	ﾊｾｶﾞﾜ ﾐｶ 長谷川　美香	教授
		ｷﾀﾃﾞ ｼﾞｭﾝｺ 北出　順子	講師
		ﾖﾈｻﾞﾜ ﾋﾛﾐ 米澤　洋美	講師
	精神看護学	ｶﾜｸﾞﾁ ﾒｸﾞﾐ 川口　めぐみ	助教
	環境科学	ﾃﾞｸﾞﾁ ﾖｳｼﾞ 出口　洋二	教授
		合計人数	89

《　医学部附属病院　》

所属名	氏　名	職　名
放射線部	ｷﾉｼﾀ ｶｽﾞﾕｷ 木下　一之	助教
検査部	ｶｽﾉ ｹﾝｼﾞ 糟野　健司	助教
集中治療部	ﾔｽﾀﾞ ﾖｼｶｽﾞ 安田　善一	講師
	ﾉﾌﾞｶﾜ ﾔｽﾅﾘ 信川　泰成	助教
輸血部	ｳﾗｻｷ ﾖｼﾏｻ 浦崎　芳正	講師
リハビリテーション部	ｺﾊﾞﾔｼ ｼｹﾞﾙ 小林　茂	准教授

	ﾏﾂｵ ﾋﾃﾞｱｷ 松尾　英明	理学療法士 （技師）
薬剤部	ﾅｶﾑﾗ ﾄｼｱｷ 中村　敏明	講師
感染制御部	ｲﾜｻｷ ﾋﾛﾐﾁ 岩崎　博道	教授
がん診療推進センター	ｶﾀﾔﾏ ｶﾝｼﾞ 片山　寛次	教授
	合計人数	9

《　高エネルギー医学研究センター　》

所属部門名	氏　名	職　名
分子イメージング展開領域	ｵｶｻﾞﾜ ﾋﾃﾞﾋｺ 岡沢　秀彦	教授
	合計人数	1

《　子どものこころの発達研究センター　》

所属部門名	氏　名	職　名
こころの形成発達研究部門	ﾑﾗﾏﾂ ｲｸﾉﾌﾞ 村松　郁延	特命教授
	ｲｸﾞﾁ ﾄｸｲﾁ 猪口　徳一	特命助教
Ａｇｅ２企画	ﾔﾏｻﾞｷ ﾐｶ 山崎　未花	特命助教
	合計人数	3

《　保健管理センター　》

所属名	氏　名	職　名
保健管理センター　松岡地区保健センター	ｳﾒｻﾞﾜ ﾕﾐｺ 梅澤　有美子	講師
	合計人数	1

《　工学研究科　》

所属専攻		氏　名	職　名
電気・電子工学	システム工学	ﾓﾘｶﾜ ﾋﾛﾖｼ 森川　博由	准教授
	電子物性	ｶﾜﾄ ｻｶｴ 川戸　栄	准教授
情報・メディア工学	計算機・通信	ﾓﾘ ｼﾝｲﾁﾛｳ 森　眞一郎	教授
		ﾓﾘ ﾐｷｵ 森　幹男	准教授
建築建設工学	都市建築設計	ｱｶｼ ﾕｷｵ 明石　行生	准教授
生物応用化学	生物化学工学	ｳﾁﾀﾞ ﾋﾛﾕｷ 内田　博之	教授

		ﾃﾗﾀﾞ ｻﾄｼ 寺田　聡	准教授
		ｵｷ ﾏｻﾔ 沖　昌也	准教授
知能システム工学	支援システム	ﾀﾅｶ ｶﾝｼﾞ 田中　完爾	准教授
	知能処理	ｵｺﾞｼ ﾔｽﾋﾛ 小越　康宏	講師
ファイバーアメニティ工学	インテリジェントファイバー工学	ｽｴ ｼﾝｲﾁﾛｳ 末　信一朗	教授
原子力・エネルギー安全工学	原子力安全工学	ｸﾜﾂﾞﾙ ｵｻﾑ 桑水流　理	准教授
		合計人数	12

《　産学官連携本部　》

所属名	氏　名	職　名
産学官連携本部	ﾖﾈｻﾞﾜ ｽｽﾑ 米沢　晋	教授
	ﾖｼﾅｶﾞ ｼｹﾞｷ 吉長　重樹	准教授
	ﾀｹﾓﾄ ﾀｸｼﾞ 竹本　拓治	准教授
	合計人数	3
	総合人数	１２１

２　特　徴

トランスレーショナルリサーチ推進センターは、平成２０年１１月の全学組織ライフサイエンスイノベーション推進機構の発足に伴い、機構を構成する一部門として設立された。本センターは、定員を有しないセンターであり、参加を希望する福井大学の教員であれば、全員センター構成員として受け入れ、その活動に参加できることとしている。ＴＲ（トランスレーショナルリサーチ）とは、基礎研究での成果を臨床・治験などへと繋げる橋渡し的な応用研究を意味しているが、本学のトランスレーショナルリサーチ推進センターでは、従来の臨床・治験などへと繋げる橋渡し的な研究のみならず、ＱＯＬの向上、健康増進につながる医学、工学、看護学、健康科学などを含めた幅広い分野での実用化を目指した応用的研究を積極的に推進することを目的としている。特に運営委員として、臨床系教員や看護学科教員、さらには産学官連携本部専任教員等を配置し、トランスレーショナルリサーチ推進センターでの事業推進のために全学的な取組を行っている点が特徴の一つである。

なお、学部の基盤を有しないトランスレーショナルリサーチ推進センターの活動は、学長をはじめとする大学当局からの継続的な経費支援（これは構成員の研究支援、大学院教育支援・大学院学生の研究支援などに使用している）や事務当局の支援のもと実現できていることを付記したい。

Ⅱ 目 的

本センターの目的は以下のとおりである。

（1）本センターに参加する教員が行うＴＲ研究・ＱＯＬの向上に関する研究・健康増進に関わる研究等のライフサイエンスに関連した幅広い応用研究に対し、研究課題を公募し、研究助成を行い、医療に関連する幅広い研究の推進に貢献する。

（2）センター主催の研究交流会を開催し、参加教員が行うＴＲ研究・ＱＯＬの向上に関する研究・健康増進に関わる研究等に関する情報交換及び学内共同研究の促進を図る。

（3）センター主催の講演会やセミナー等を開催し、参加教員及び全学の教員にＴＲ研究対する理解を深めると同時に、センターへの参加、協力を依頼する。

（4）センターでのＴＲ研究の成果は、特許の取得や産官学の連携を通して実用化していくことが大切であり、医学部附属病院や産官学連携本部と連携し、その実用化を目指す。

Ⅲ　基準ごとの自己評価

基準１トランスレーショナルリサーチ推進センターの設置目的

（１）基準ごとの分析

基準１－１：設置目的が明確に定められており、その内容が本学の目的に適合するものであること。

（基準に係る状況）

福井大学の理念に基づいた目的及び中期目標を達成するためにトランスレーショナルリサーチ推進センターは、学則第８条第２項の規程に基づき設置されている教育研究施設であり、トランスレーショナルリサーチ推進センター規程において設置目的が明確に定められている。

※理念

福井大学は、学術と文化の拠点として、高い倫理観のもと、人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し、地域、国及び国際社会に貢献し得る人材の育成と、独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究、先端科学技術研究及び医学研究を行い、専門医療を実践することを目的とする。

※学則　抜粋

（学内共同教育研究施設等）

第８条　本学に、次の学内共同教育研究施設等を置く。

（略）

２　学長は、前項に掲げるもののほか、教育研究等に必要な施設等を置くことができる。

※本学中期目標　抜粋

（前文）大学の基本的な目標

本学の使命は「学術と文化の拠点として、高い倫理観のもと、人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し、地域、国及び国際社会に貢献し得る人材の育成と、独創的でかつ地域の特色に鑑みた教育科学研究、先端科学技術研究及び医学研究を行い、専門医療を実践すること」にあり、このために大学の基本的な目標を次のように定める。

１．福井大学は、21 世紀のグローバル社会において、高度専門職業人として活躍できる人材を育成します。

２．福井大学は、教員一人ひとりの創造的な研究を尊重するとともに、本学の地域性等に立脚した研究拠点を育成し、特色ある研究で世界的に優れた成果を発信します。

３．福井大学は、優れた教育、研究、医療を通じて地域発展をリードし、豊かな社会づくりに貢献します。

４．福井大学は、ここで学び、働く人々が誇りと希望を持って積極的に活動するために必要な組織・体制を構築し、社会から頼りにされる元気な大学になります。

Ⅰ　大学の教育研究等の質の向上に関する目標

１　教育に関する目標

（１）教育内容及び教育の成果等に関する目標

○基本目標「21 世紀のグローバル社会において高度専門職業人として活躍できる人材の育成」を目指して、国際的にも通用する質の高い教育を実践する。

（２）学生への支援に関する目標

○社会を主体的・能動的に担っていく人間の形成を目指して、学生の成長を積極的に促す学習支援、生活支援、就職支援を行う大学づくりを進める。

２　研究に関する目標

（１）　研究水準及び研究の成果等に関する目標

○目指すべき研究の水準

①独創的でかつ特色のある重点研究を推進し、国際・国内研究拠点の形成を目指す。

②科学技術の発展に寄与する学術研究を推進する。

③地域・社会へ貢献する実践研究を推進する。

○成果の社会への還元

社会のニーズを踏まえ、地域の産業界・自治体等と連携し、本学の特色を生かした研究成果を社会に還元する

（2） 研究実施体制等に関する目標

○研究環境の整備

①研究面でのグローバル化を図り、特色ある研究成果を世界に向け発信するための体制及び環境を整備する。

②教員個人及び組織の研究目標の達成並びに新たな研究分野の開拓に向け、適切な研究体制及び環境を確保する。

3 その他の目標

（1） 社会との連携や社会貢献に関する目標

①地域の知の拠点として、高度な知的資源を社会に還元する。

②地域との連携などによる生涯学習とキャリアアップ学習を推進する。

③地域との連携などにより、地域の活性化等に貢献する。

Ⅱ 業務運営の改善及び効率化に関する目標

組織運営の改善に関する目標

本学の教育研究医療及び社会貢献上の使命を果たすため、学長をトップとするガバナンスの在り方、学長のリーダーシップを支える体制や裁量的予算・人件費、学外者の意見の効果的な活用、教育研究組織の在り方などについて継続的に点検・改善を行う。

Ⅲ 財務内容の改善に関する目標

外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加に関する目標

外部資金等の自己収入獲得支援体制の見直しを行い、自己収入の増加を可能とする体制強化を進める。

Ⅳ 自己点検・評価及び該当状況に係る情報の提供に関する目標

1．評価の充実に関する目標

教育研究の活性化や大学運営の継続的な改善に向け、評価を積極的に活用する。

2．情報公開や情報発信等の推進に関する目標

国民に支えられて成立している国立大学法人であることを踏まえ、教育研究等成果の社会の還元を積極的に推進する。

（分析結果とその根拠理由）

トランスレーショナルリサーチ推進センターの設置目的は、前述のとおりトランスレーショナルリサーチ推進センター規程に定められており、第2条に設置目的として、「本学における生命科学及び関連分野の活動において、臨床応用に向けた橋渡し研究の拠点としての役割を果たすとともに、将来の先端医療、ＱＯＬの向上、健康増進に繋がる医学、工学、看護学、健康科学などを含めた幅広い分野の実用化を目指した応用的研究を積極的に推進することを目的とする。」と規定されている。

また、本学中期目標より、トランスレーショナルリサーチ推進センターは、その具現化を目指したのであることが分かる。さらに、平成20年10月には、生命科学複合研究教育センター、トランスレーショナルリサーチ推進センター、ライフサイエンス支援センターの3センターにて構成するライフサイエンスイノベーション推進機構が設置されている。ライフサイエンスイノベーション推進機構においても、第2条に設置目的として、「本学における生命科学及び関連分野の研究・教育の充実と成果の創出及びその実用化のため、（中略）世界トップレベルの「知」の拠点として、イノベーション創出の原動力となることを目的とする。」と規定され、これまで以上に本学の生命科学及び関連分野の活動において、臨床応用に向けた橋渡し研究の拠点としての役割を果たすとともに、将来の先端医療、ＱＯＬの向上、健康増進に繋がる医学、工学、看護学、健康科学などを含めた幅広い分野での実用化を目指した応用研究の中心的役割を担うことが期待される。

【資料１　トランスレーショナルリサーチ推進センター規程（Ｐ1）】
【資料２　ライフサイエンスイノベーション推進機構規程（Ｐ3）】
【資料４　本学の中期目標・中期計画（Ｐ19）】

基準１－２：設置目的が、本学構成員に周知されているとともに、地域・社会に公表されていること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センターは、活動報告書を毎年度作成し本学構成員に配付しており、福井大学のホームページにおいて学内外に公表している。また、年度当初、トランスレーショナルリサーチ推進センターの目的を含む活動計画の紹介及び構成員募集通知を学内の教員に対して行っている。加えて、福井大学案内には、健康増進につながる幅広い分野での実用化を目指すセンターとして記載がされている。さらに、運営委員会委員も各キャンパスより選出している。

【資料８～１２ トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書（2008年度（Ｐ56～Ｐ64）、2009年度（Ｐ104～Ｐ114）、2010年度（Ｐ112～Ｐ119）、2011年度（Ｐ96～Ｐ102）、2012年度（Ｐ128～Ｐ137）】

（分析結果とその根拠理由）

トランスレーショナルリサーチ推進センターの存在は、本学の概要など紹介パンフレットなどに紹介されており、学内的にも地域社会にもその存在は認識されている。また、センターの活動により、センターの存在意義は広く認められている。例えば、設置目的に沿う成果は、毎年発行する活動報告書で学内外に公表されている。

【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書2008年度～2012年度　計5冊】

（２）優れた点及び改善を要する点　（優れた点）

トランスレーショナルリサーチ推進センタースタッフは、医学部教員・技師のみならず、教育地域科学部、工学研究科の教員も参加しており、幅広い範囲の研究チームが組織できる。

（３）基準１の自己評価の概要

本学にトランスレーショナルリサーチ推進センターが存在し、活動を続けていることは学内・外に広く認知されていることから、十分に達成されていると判断できる。

基準２　トランスレーショナルリサーチ推進センターの組織（実施体制）

（１）基準ごとの分析

基準２－１：組織構成が、設置目的に照らして適切なものであること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センター規程第４条に基づき、センター長、副センター長、兼任教員、その他必要な職員により構成されている。

（分析結果とその根拠理由）

トランスレーショナルリサーチ推進センターでは、福井大学全体の「将来の先端的医療技術開発に繋がる応用的研究」の研究活動の活性化を実現・支援する活動を行っている。特に特定の学部や組織を限定することなく組織を構築している点は、福井大学の全体的組織として優れている。さらに、設置目的に沿った形で副センター長などが配置されており、実行と責任の所在・範囲が明確に定められ活動を実施している。

【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書（運営委員会委員一覧）2008年度（Ｐ56）、2009年度（Ｐ104）、2010年度（Ｐ112）、2011年度（Ｐ96）、2012年度（Ｐ128）】

基準２－２：設置目的を達成する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能していること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センターの管理運営については、トランスレーショナルリサーチ推進センター運営委員会（センター長1、副センター長1、兼任教員　若干名、各学部から推薦された教員　若干名）が担っており、計画的に活動を実施している。

事務支援体制としては、研究推進課が中心となり、松岡キャンパス総務室及び松岡キャンパス学務室の協力のもと活動を行っている。

（分析結果とその根拠理由）

トランスレーショナルリサーチ推進センターは設置５年を経過した。過去５年間では、運営委員会を2008年度２回、2009年度２回、2010年度２回、2011年度２回、2012年度２回開催し、予算執行計画、研究・教育・社会貢献の各活動実施、その他センターの運営事項について協議等を行っている。設立以来順調に運営されており（基準５活動状況参照）、研究、教育及び社会貢献の様々な活動を展開している。特に運営委員会において、上記３つの活動内容について深くかつ頻繁に協議が行われ、研究費の配分をはじめとする研究支援、、特定研究の推進、研究発表会による異なる領域間での共同研究の推進、大学院生のトランスレーショナルリサーチ推進センター主催の各種セミナー受講者増のための働きかけ、新たなテーマも加えた県内諸機関との連携強化による社会貢献活動の充実が図られてきた。加えて、全構成員への改善に向けた毎年度の活動アンケートを実施した。

【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書2008年度（Ｐ55～Ｐ64）、2009年度（Ｐ103～Ｐ114）、2010年度（Ｐ111～Ｐ119）、2011年度（Ｐ95～Ｐ102）、2012年度（Ｐ127～Ｐ137）】

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

目的が明瞭に設定され、その実現に対応した組織となっている。かつ、運営委員会では、常によりよき活動のあり方を議論し、実行を図っており、活動内容のより充実・活性化に結びついている。

（３）基準２の自己評価の概要

十分達成されている。

組織構成が設置目的の実現に効率的な体制であり、運営委員会も必要十分に開催され、機能し、期待される活動が十分に行われている。

基準３　教員及び支援者

（１）基準ごとの分析

基準３－１：設置目的を遂行するために必要な教員が適切に配置されていること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センター規程では、センター長、副センター長、兼任教員、その他必要な職員を置くことになっている。（トランスレーショナルリサーチ推進センター規程第４条）

（分析結果とその根拠理由）

兼任教員をトランスレーショナルリサーチ推進センター参加教員として、2008 年度 83 名、2009 年度 119 名、2010 年度 132 名、2011 年度 132 名、2012 年度 121 名の参加を得て活動を行っている。

センター長を始め、全員が兼任教員である。必要に応じて学内で関係する研究教育を行っている教員を兼任教員として参加させることができる柔軟な体制となっており、適切な教員配置になっている。その結果、医療および健康科学等に関する研究を遂行している３学部及び学内教育研究施設の研究者が融合した適切な教員の構成になっている。

基準３－２：教員の採用及び昇格に当たって、適切な基準が定められ、それに従い適切な運用がなされていること。

（基準に係る状況）

該当なし。（専任教員が配置されていないので、評価対象外である。）

（分析結果とその根拠理由）

該当なし。

基準３－３：設置目的を遂行するための基礎となる研究活動が行われていること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センター規程第３条に業務として

（１）将来の先端的医療技術開発に繋がる応用的研究に関すること。
（２）ＱＯＬの向上に関連する応用的研究に関すること。
（３）健康の維持・増進に関連する応用的研究に関すること。
（４）生命科学複合研究教育センターとの連携による教育に関すること。
（５）その他前条の目的を達成するために必要な業務

が述べられている。

（分析結果とその根拠理由）

十分な活動が実施されており（基準５活動状況を参照）、教員は適切に配置され活発に活動し、かつ事務的な支援体制は十分に機能した。特に研究推進課、松岡キャンパス総務室は支援事務全般、松岡キャンパス学務室は大学院セミナーでの授業補助を実施した。

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

各活動に対し兼任教員が積極的に参加し円滑に運営されている。

（３）基準３の自己評価の概要

十分達成されている。

教員等の配置が適切であると判断し、十分な活動がなされている。

基準３－４：設置目的を遂行するために必要な支援者の配置や補助者の活用が適切に行われていること。

（基準に係る状況）

この点について、センター規程には特に定められていない。しかし、本学の橋渡し研究や応用研究など支援を行っている。また、将来の臨床・治験などへと繋げる橋渡し的な研究のみならず、ＱＯＬの向上、健康増進につながる医学、工学、看護学、健康科学などを含めた幅広い分野での実用化を目指した応用

的研究を推進することを目的としている。各教員の協力により、医学部をはじめとする松岡地区や、工学研究科、教育地域科学部の文京地区から多数の教員が参加し、活動している。

（分析結果とその根拠理由）

十分な活動が実施されており（基準５活動状況を参照）、教員は適切に配置され活発に活動し、かつ事務的な支援体制は十分に機能した。特に研究推進課、松岡キャンパス総務室は支援事務全般、松岡キャンパス学務室は大学院セミナーでの授業補助を実施した。

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

各活動に対し教員が積極的に参加され円滑に運営されている。

（３）基準３の自己評価の概要

十分達成されている。

教員等の配置が適切であると判断し、十分な活動がなされている。

基準４　学生研究者等の受入れ

（１）基準ごとの分析

基準４－１：設置目的に沿って、求める学生・研究者像が明確に定められ、公表・周知されていること。

（基準に係る状況）

求める学生・研究者像を明確に定めており、ポスターやホームページで周知を図っている。

（分析結果とその根拠理由）

全学の研究者に対しては、トランスレーショナルリサーチ推進センターの研究助成についての参加をメールにて呼びかけている。さらに、トランスレーショナルリサーチ推進センターでは、ホームページを運営し、設置目的等の公表・周知を図っている。

【資料５　トランスレーショナルリサーチ推進センターホームページ（Ｐ27)】

【資料６　福井大学案内（Ｐ41)】

基準４－２：設置目的に沿って、適切な学生・研究者等の受入れが実施され、機能していること。

（基準に係る状況）

兼任教員参加の体制のもと、トランスレーショナルリサーチ推進センター参加教員は、平成 20 年度 83 名、平成 21 年度 119 名、平成 22 年度 132 名、平成 23 年度 132 名、平成 24 年度 121 名の参加を得て活動を行っている。

さらに、研究支援のため、トランスレーショナルリサーチ研究に係る公募採択型研究費により研究助成を行っている。【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2008 年度（Ｐ1～Ｐ26)、2009 年度（Ｐ3～Ｐ24)、2010 年度（Ｐ3～Ｐ23)、2011 年度（Ｐ3～Ｐ31)、2012 年度（Ｐ3～Ｐ29)】

（分析結果とその根拠理由）

４つの活動について、それぞれ活発に活動がなされ、成果が挙がっている。特に研究については、高い水準の研究が実施されつつあり、共同で競争的研究費獲得も進んでいる。

また、研究者もセンター参加を通して、キャンパス間をまたぐ共同研究を実施している（医学部と工学研究科との共同研究等)。

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

受入れ参加者は毎年 90 名を超え、成果が挙がっている。

（３）基準４の自己評価の概要

十分達成されている。

学生像・研究者像を明確に定められており、参加者が増え、成果が挙がり、その目的が十分に達成された。

基準５　活動状況

（１）基準ごとの分析

基準５－１：設置目的に沿った活動が、充分に行われていること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センターには、次の５つの責務が与えられている（センター規程第３条）。

（１）将来の先端的医療技術開発に繋がる応用的研究に関すること。
（２）ＱＯＬの向上に関連する応用的研究に関すること。
（３）健康の維持・増進に関連する応用的研究に関すること。
（４）生命科学複合研究教育センターとの連携による教育に関すること。
（５）その他前条の目的を達成するために必要な業務

が述べられている。

（分析結果とその根拠理由）

主な活動状況は次のとおり。

（詳細については、【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2008 年度（Ｐ1～Ｐ53)、2009 年度（Ｐ1～Ｐ101)、2010 年度（Ｐ1～Ｐ111)、2011 年度（Ｐ1～Ｐ94)、2012 年度（Ｐ1～Ｐ126)】を参照

① 研究交流会

トランスレーショナルリサーチセンターにおける研究活動を推進するため、センター参加教員及び大学院生に「研究交流会」を年１回開催した。（生命科学複合研究教育センターとの合同開催）

構成員の交流を深め、新たな共同研究のシーズを発掘する必要から、研究交流会【資料９～１２ トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2009 年度（Ｐ25～Ｐ42)、2010 年度（Ｐ25～Ｐ46)、2011 年度（Ｐ33～Ｐ61)、2012 年度（Ｐ31～Ｐ67)】を参照）を各年度に開催した。その際、生命科学関連分野での先端的な研究の推進、臨床応用への発展を図るため、トランスレーショナルリサーチ推進センターとの合同で行われた。研究交流会は、毎年度８月下旬に２日間の日程で行われ、2009 年度は 30 題、2010 年度は 34 題、2011 年度は 32 題、2012 年度は 32 題の研究発表があり、活発に討論された。

② 公募採択型研究支援・研究発表会での研究成果報告

トランスレーショナルリサーチセンターの設置目的のひとつは、医学・生物学を含む生命科学や関連する広い分野を専門とする教員が学部等の枠を超えて継続的に共同研究を進めることである。トランスレーショナルリサーチセンターではこの目的を達成するため、2008 年度～2012 年度に「トランスレーショナルリサーチセンター公募採択型研究費」係る研究費の公募を行った。トランスレーショナルリサーチセンターの設置目的達成のため、学部を超えた共同研究とそれに従事する学生・研究者に対する支援を第１の優先順位とし、さらに高いレベルの学部内共同研究、続いて萌芽的・先端的研究の順とした。

採択された研究課題については、年度末での研究成果報告書の提出とともに、生命センター・トランスレーショナルリサーチセンターの合同での開催の研究交流会での成果報告を義務付けた。具体的には、2008 年度は、11 件総額 270 万円【資料８ トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2008 年度（Ｐ1～Ｐ26)】、2009 年度は、9 件総額 250 万円【資料９　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2009 年度（Ｐ3～Ｐ24)】、2010 年度は、8 件総額 330 万円（【資料１０ トランスレーショナルリサーチ推進センター2010 年度（Ｐ3～Ｐ23)】、2011 年度は、11 件総額 330 万円【資料１１ トランスレーショナルリサーチ推進センター2011 年度（Ｐ3～Ｐ31)】、2012 年度は、10 件総額 330 万円【資料１２ トランスレーショナルリサーチ推進センター2012 年度（Ｐ3～Ｐ29)】の研究助成を行った。また、採択研究課題の代表者に研究助成に関するアンケートを行い、より効果的な研究助成の在り方を検討している。【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター 2008 年度（Ｐ27～29)、2009 年度（Ｐ76～Ｐ78)、2010 年度（Ｐ63～Ｐ65)、2011 年度（Ｐ75～Ｐ78)、

2012年度（P85～P87)】

これらの活動の成果とも考えられるが、センター参加教員間に学内共同研究は、研究助成を行ったテーマも含め、2008年度、2009年度、2010年度、2011年度、2012年度で延べ84件に達している【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター2008年度（P2～P24)、2009年度（P4～P22)、2010年度（P4～P20)、2011年度（P4～P27)、2012年度（P4～P25)】。

③ 公募採択型研究支援助成対象者へのアンケート

「トランスレーショナルリサーチ推進センター重点プロジェクト研究」「トランスレーショナルリサーチ推進センター学内共同研究等」助成対象教員に対して支援の内容に関するアンケートを行い、フィードバックを図った。

【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター2008年度（P27～29)、2009年度（P76～P78)、2010年度（P63～P65)、2011年度（P75～P78)、2012年度（P85～P87)】

基準５－２：活動状況の結果が、学内及び地域・社会に対して公表されていること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センターに係る年間の活動報告（研究活動、教育活動）をまとめた活動報告書を毎年発行し、学内に公表している。地域・社会に対しては、ホームページを通じて公表を行っている。また、トランスレーショナルリサーチ推進センター参加教員による本センター名での研究に関連した学術論文【資料８～１２ トランスレーショナルリサーチ推進センター2008年度（P30～P50)、2009年度（P80～P99)、2010年度（P67～P83）2011年度（P80～P89)、2012年度（P90～P110)】の発表や学会・シンポジウム等での発表の際には、トランスレーショナルリサーチ推進センターの寄与を明記するように奨励している。

（分析結果とその根拠理由）

トランスレーショナルリサーチ推進センターが実施してきた活動については、全て活動報告書として公刊されており、学内に広く配布されている。特に研究活動に関する2008年度、2009年度、2010年度、2011年度、2012年度活動報告書では、研究助成を受けた研究テーマ及びそれらの研究成果報告書を掲載した【資料８～１２ トランスレーショナルリサーチ推進センター2008年度（P1～P24)、2009年度（P3～P22)、2010年度（P3～P20)、2011年度（P3～P27)、2012年度（P3～P25)】。さらにトランスレーショナルリサーチ推進センター参加教員間によるすべての研究業績の一覧についても公表している【資料８～１２ トランスレーショナルリサーチ推進センター2009年度（P79～P101)、2010年度（P66～P109)、2011年度（P79～P94)、2012年度（P89～P125)】。これらの活動により、トランスレーショナルリサーチ推進センターの活動内容が広く公開されている。

特にホームページは、トランスレーショナルリサーチ推進センター運営員会が中心となり構成を検討し、事務局（研究推進課）にて、随時更新を行っている。

【資料５ トランスレーショナルリサーチ推進センターホームページ（P27)】

【資料６ 福井大学案内（P41)】

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

トランスレーショナルリサーチ推進センターのホームページが頻回に随時更新され、活動内容が広く公表されている。

（研究活動）について

トランスレーショナルリサーチ推進センターの目的の一つである、学部等の枠にとらわれることなく、生命科学及び関連する広い分野の教員を結集し、これらの分野での高い水準での共同研究を実施するため、2009年度から４年間、トランスレーショナルリサーチ推進センター参加教員と生命科学複合研究教育センター参加教員との合同による研究発表会を開催したことは、特筆される。特に、2011年度においては、大学から離れた場所での合宿という形式で実施した意義は大きかった。

学部の異なる研究者同士の交流は、普段は殆んどないのが実情であったが、トランスレーショナルリサーチ推進センターによる研究交流会の開催で、お互いの交流が深まり研究に対する理解が大いに

深まり、新たな共同研究開始の端諸となったことは、大変優れた点である。
【資料５ トランスレーショナルリサーチ推進センターホームページ（Ｐ27）】

（３）基準５の自己評価の概要

十分達成されている。
研究活動の結果の公表は十分なされていると判断できる。

基準６　設置目的の成果

（１）基準ごとの分析

基準６－１：設置目的の成果野効果が上がっていること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センターの設置【(資料１　トランスレーショナルリサーチ推進センター規程第２条（Ｐ1)】として、本学における生命科学及び関連分野の活動において、臨床応用に向けて橋渡し研究の拠点としての役割を果たすとともに、将来の先端医療、ＱＯＬの向上、健康増進に繋がる医学、工学、看護学、健康科学などを含めた幅広い分野での実用化を目指した応用的研究を積極的に推進することを目的とすることが謳われている。

上記に関しては、トランスレーショナルリサーチに関する学内共同研究等に対し研究助成を行い、採択された研究課題については、研究成果の報告を義務付けており、本センターでの研究に関連した学術論文の発表や学会・シンポジウム等での発表を奨励している。

（分析結果とその根拠理由）

トランスレーショナルリサーチ推進センターでの研究成果は、2008 年度、2009 年度、2010 年度、2011 年度、2012 年度のそれぞれの活動報告書【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2008 年度（Ｐ1～Ｐ53)、2009 年度（Ｐ1～Ｐ101)、2010 年度（Ｐ1～Ｐ109)、2011 年度（Ｐ1～Ｐ94)、2012 年度（Ｐ1～Ｐ125)】に記載されており、確実に成果を上げている。また、トランスレーショナルリサーチ推進センター参加教員間による学内共同研究は、研究助成を行ったテーマも含め、2008 年度 24 件、2009 年度 22 件、2010 年度 12 件、2011 年度 12 件、2012 年度 14 件で延べ 84 件に達している【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2008 年度（Ｐ2)、2009 年度（Ｐ4)、2010 年度（Ｐ4)、2011 年度（Ｐ4)、2012 年度（Ｐ4)】。トランスレーショナルリサーチ推進センターでの研究活動は、学部間共同研究を主体とする水準での高い研究を行うことが求められているが、研究交流会の開催や研究助成の実施等により、年々研究の質・量とも向上している。

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

研究、教育それぞれの点で、上述のとおり特筆すべき実績があった。研究交流会の開催や研究助成等を通して、学部間共同研究のみならず、本学の生命科学に関する研究全般に関しても、生命科学に関連した学部間共同研究が著しく活性化され、研究成果が生み出されつつある。また、大学院生に対して学内セミナー（大学院セミナー）を開催し、学部を超えた研究指導を通して、大学院生の生命科学研究に対する意欲や理解を高めている。

以上のように、数多くの特筆された成果が得られた。

（３）基準６の自己評価の概要

優れた実施状況である。

基準７　学生・研究者等の支援等

（１）基準ごとの分析

基準７－１：設置目的に沿った履修指導・研究指導が適切に行われていること。また、学生・研究者等の自主的学習等を支援する環境が整備され、かつ相談・助言体制等の支援が適切に行われていること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センターの設置目的や必要な相談ができるようセンター長及び事務局（研究推進課）のメールアドレスを含む案内資料を作成している。2009年度より教員・大学院生・研究者等に対してトランスレーショナルリサーチ推進センターセミナー、2011年度よりトランスレーショナルリサーチ推進センターと大学院との合同セミナーとして行った。なお、2009年度７回、2010年度７回、2011年度５回、2012年度７回、計26回行い、参加者数は延べ792名であった。

【資料９～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2009年度（Ｐ44）、2010年度（Ｐ48）、2011年度（Ｐ64）、2012年度（Ｐ70）】

（分析結果とその根拠理由）

セミナーに参加した大学院生からのアンケートによると大変役に立ったとの意見が寄せられており、大学院生に対する支援として適切であった。

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

上述のとおり学生への支援体制が、多岐にわたり行われており、学生の教育、研究活動に対するサポート体制は十分に整備されている。

（３）基準７の自己評価の概要

十分達成されている。

基準８　施設・整備

（１）基準ごとの分析

基準８－１：設置目的に対応した施設・設備が整備され、有効に活用されていること。

（基準に係る状況）

該当なし。

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

該当なし。

（改善を要する点）

該当なし。

（３）基準８の自己評価の概要

該当なし。

基準９　財務

（１）基準ごとの分析

基準９－１：設置目的を達成するために、活動を将来にわたって適切かつ安定して遂行できるだけの財務基盤を有していること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センターは、学内配分予算である学長裁量経費による経費により運営されている。加えて学内外の公募採択事業に積極的に申請し、経費を確保し活動を行っている。

【資料７　平成20、21、22、23、24年度予算執行状況（Ｐ43）】

（分析結果とその根拠理由）

トランスレーショナルリサーチ推進センターは、学長裁量経費（2008年度2,700千円、2009年度2,500千円、2010年度3,300千円、2011年度3,300千円、2012年度3,300千円）の合計15,100千円をベースに毎年度各活動を実施した。

【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書2008年度（Ｐ55）、2009年度（Ｐ103）、2010年度（Ｐ111）、2011年度（Ｐ95）、2012年度（Ｐ127）】

基準９－２：設置目的を達成するための活動の財務上の基礎として、適切な収支に係る計画等が策定され、履行されていること。

（基準に係る状況）

予算については、毎年度、予算案を策定しトランスレーショナルリサーチ推進センター運営委員会において審議のうえ、承認を得て年間を通じて計画的な執行を行っている。また、決算についても同じく運営委員会の承認を得ている。

（分析結果とその根拠理由）

トランスレーショナルリサーチ推進センターの活動は、本学における生命科学及び関連分野の活動において、臨床応用に向けた“橋渡し研究の拠点”としての役割を果たすとともに、将来の先端医療、ＱＯＬの向上、健康増進に繋がる医学、工学、看護学、健康科学などを含めた幅広い分野での実用化を目指した応用的研究を積極的に推進する活動に対して適正なバランスの取れた予算を配分して有効に執行しており、十分な成果を得ている。

（２）優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

大学当局の理解のもと、自らも積極的に経費獲得に努力している。

（３）基準９の自己評価の概要

十分達成されている。

基準１０　管理運営

（１）基準ごとの分析

基準１０－１：設置目的を達成するために必要な管理運営体制及び事務組織が整備され、機能していること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センターの管理運営体制として、センター長、副センター長、運営委員、兼任教員等からなる組織であり、十分機能している。事務局は、研究推進課及び松岡キャンパス総務室が必要に応じ松岡キャンパス学務室に参加を求め協力して活動を行っている。

（分析結果とその根拠理由）

他の学内共同教育研究施設と同様にトランスレーショナルリサーチ推進センターの管理運営も運営委員会が中心となり運営しており十分に機能している。さらに、構成員に対し、年に一度活動状況に関するアンケートを求め、活動の参考としている。なお、運営活動状況の詳細については、各年度の活動報告書に記載している。アンケートによれば、活動内容・状況について、トランスレーショナルリサーチ推進センター構成員の満足度は高い【資料８～１２　トランスレーショナルリサーチ推進センター活動報告書 2008 年度（Ｐ27～Ｐ28)、2009 年度（Ｐ76～Ｐ78)、2010 年度（Ｐ63～Ｐ65)、2011 年度（Ｐ75～Ｐ78)、2012 年度（Ｐ85～Ｐ87)】。

基準１０－２：管理運営に関する方針が明確に定められ、それらに基づく規程が整備され、各構成員の責務と権限が明確に示されていること。

（基準に係る状況）

トランスレーショナルリサーチ推進センター規程の第４条、第５条及び第６条において、明確に示されている。

【資料１　トランスレーショナルリサーチ推進センター規程（Ｐ1～Ｐ2）抜粋】

（職員）

第４条　センターに次の職員を置く。

（１）トランスレーショナルリサーチ推進センター長（以下「センター長」という。）

（２）副センター長

（３）兼任教員

（４）その他必要な職員

２　センター長及び副センター長の選考に関し必要な事項は，別に定める。

３　兼任教員は，所属する部局の長の推薦に基づき，学長が任命する。

（職務）

第５条　センター長は，センターの業務を掌理する。

２　副センター長は，センター長を補佐し，センター長に事故があるときは，その職務を代行する。

３　兼任教員は，センターの方針に従い，先端的生命科学及びＱＯＬ関連分野の臨床応用に繋がる研究を行う。

４　その他の職員は，センターの業務に従事する。

（運営委員会）

第６条　センターの円滑な運営を図るため，福井大学トランスレーショナルリサーチ推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

２　運営委員会は，次の各号に掲げる事項を審議する。

（１）センターの研究活動に関すること。

（２）センターの管理運営に関すること。

（３）センターの評価に関すること。

（4）その他センターに関する必要な事項

3　運営委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
（1）センター長
（2）副センター長
（3）兼任教員　若干名
（4）各学部から推薦された教員　若干名
4　前項第3号の委員はセンター長の推薦に基づき，第4号の委員は各学部長の推薦に基づき，それぞれ学長が委嘱する。
5　前項の委員の任期は，2年とし，再任を妨げない。ただし，欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は，任者の残任期間とする。
6　運営委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。
7　運営委員会は，委員の過半数の出席をもって成立し，議事は出席委員の過半数をもって決し，可否同数のときは，委員長の決するところによる。

（分析結果とその根拠理由）
上記規程の第4条、第5条、第6条にそれぞれ、職務について責務・権現及び運営委員会の設置が明記されている。これらに基づき、センター長及び副センター長のもと、トランスレーショナルリサーチ推進センター運営委員会で承認された年間活動計画に沿いながら、各構成員が責任を持って活動を行っている。

（2）優れた点及び改善を要する点
（優れた点）
管理運営においては、十分な体制のもと円滑に実施している。

（3）基準10の自己評価の概要
十分に達成されている。